『経済原論』　質問項目　その２

2018年2月19日

# Ａ．資本と姿態変換について

## Ａ.１　姿態変換の必要について

### A.1.1　資本の概念の問題

「売買を通じて姿態変換する(1) 本体の価値が増大しても、それはただちに運動体レベルでの価値増殖にはならない。この過程で支出された (2) 流通費用を控除しなくてはならない。」（92頁）

←①「価値の増大」と「資本の価値の増殖」という区別があるのか？（309頁の問題66解説も参照）

価値増殖と区別される価値増大とは、姿態変換（W’－G’）を経ていないという意味か？

「価値の増大」は売買差額が存在すること。商品と貨幣のレベルで規定可能。「価値増殖」は、「資本」の増殖。分母を投下資本額においた分子としての利潤の存在。資本のレベルでの「増殖」では、流通費用を控除した純利潤が利潤となる。

←②これは、売買には労力・資材が必要という市場の性質を認識する必要、そのための流通費用を明示的に計算・管理するフレームワークとしての資本の理解が重要、ということか？

そうです。

←③逆に言えば、流通費用が不要な商品は本体の価値増大を直ちに運動体レベルの価値増殖としてよいか？　たとえば、集中的な市場で大量に売買される金融資産商品や、取引所で売買される素材的な商品（いわゆるコモディティ商品）

「取引所」で売買される商品も、流通費用はかかっている。諸々の手数料の存在。流通費用が仮にゼロの商品が存在するとしてとしても、概念的に区別されるべき。

　しかしこれらの商品は価格変動が大きいので、流通費用が不要としても、その時点での市場価格を基に販売していない段階でも価値増殖したといえるだろうか？　つまり内在的な価値を持たず、市場価格は変動するので、増殖を確認した後で、価格の下落とともに増殖分は減少するかもしれない。その点を踏まえれば、（少なくとも名目額では）価値減少しない貨幣に死体返還した後、つまり価値実現の後で蔵相を確認するのが確実といえる。とはいえ資産としての価値評価のように、不確実で、後に修正されるとしても現時点での価値増大（あるいは増加、増殖）額を確認する必要もあるかもしれない。

「内在的な価値」をもたない商品に関しては、「価値増殖」を考えても意味がない。しかし、証券であれコモディティであれ、同種大量性を有する商品は、価格で表現される内在的な価値をもつ。

### A.1.2　固定資本と姿態変換の問題

「資本は姿態変換を通じて、資産価値の評価を繰り返し行うことで増殖の事実を確かめる。この観点からみると、減価償却を通じて、期間をかけて部分的に投下された価値を回収する必要のある固定資本は、それ自体資本にとって厄介なお荷物である」（201頁「地代」の「土地資本」）

←①ここで「評価」が行われるというのは、購入と販売の二つか、それとも販売だけか？　貨幣の価値の不可知性を踏まえれば、保有貨幣に対する価値評価も商品の購入によって評価される、といえるのか？（通常の価値尺度とは逆）　　ところで、そもそも「評価」とは価値尺度とは異なるのか？

「価値尺度」というのは、（同じ価格での売り戻しを許さないかたちで）販売を通じて価格を確定し、商品の価値を「はかる」（「尺度する」）こと。貨幣の側がその価値を「はかる」（「はかられる」）ということはない。

←②姿態変換は、増殖の事実を確かめるだけで、増殖の事実は姿態変換におけるW’－G’ （あるいはG－W）の前に生じている、と考えてよいのか？　（この質問はA.1.1①とリンク）

売買には不可逆性があり、価値増殖は不可逆性をもつ売買で「確定される」。ただ「確かめる」というだけでは、この不可逆性が示されない。

## Ａ.２　金貸資本形式Ｇ…Ｇ’形式、あるいは銀行業資本における姿態変換について

### A.2.1　 金貸資本形式は資本形式ではないか？

「自分の貨幣を貸して利子をとるという方式は、資本の概念規定に照らして、そもそも資本とはいいがたい。姿態変換を通じて価値増殖しているわけではないからである」…「考えられる形式はすべて「商人資本形式」に帰着する」（87頁）

←①銀行業資本との関係でどう考えるか？

1. 銀行業資本は自分の貨幣を貸すわけではない、ということか？
2. 銀行業資本も商人資本形式に帰着させられるような姿態変換を行っているのか？

そうです。ただ、それだけではなく、「資金」を安く買って高く売るというのでもないという点も含みます。このように、銀行業資本を、商人資本の形式G --- W(資金or債券) --- G’ で考えるのも誤りです。

←②ところで、山口『経済原論講義』では商品売買資本や商品生産資本の姿態変換（循環する本体部分）をそのまま「貨幣融通資本の形式」までつなげている。

「貨幣融通資本の形式」では、他の二つの資本の形式（商品売買資本・商品生産資本）と同様に、二つの部分に分かれる。一つは貸付・返済を繰り返す資本部分（あるいは証券を購入・販売を繰返す部分）であり、この部分は循環する資本の本体。もう一つは貸付活動のために支出されて消費されて、循環しない貸付活動資本部分（山口『経済原論講義』74‐75頁）

　こうして、金貸資本形式に相当する「貨幣融通資本の形式」を、【貨幣－債権（証券）－貨幣】という姿態変換として資本の循環運動に組み入れている。（価値増殖の源泉は貸付利子と、証券の価格差　同書75頁）

　しかし、価値の姿態は貨幣と商品のみだから、債権・証券が商品といえるのだろうか？

　遊休貨幣を利用する方法としての［債権・証券の購入－販売］は姿態変換、と定義してしまう方法もありうるか？

銀行業資本は、投下資本を姿態変換させるわけではない。商業手形のような債権を、自己の債務（銀行券や預金）と債権（割引手形や貸付金のような「資産」項目）に転換することで、この債権マイナス債務を粗利潤とする。

「貨幣融通資本の形式」で「貸付・返済を繰り返す資本部分」として、債権債務の部分をも「資本」にしてしまったのは誤り。銀行業資本とあらわれる資産・負債の全体と、銀行の自己資本を明確にするために、私は、「銀行業資本」と「銀行資本」という用語を区別してみました。

### A.2.2　銀行業資本における姿態変換について

①しかし、債権と債務を両建てで拡大する銀行資本（銀行業資本）では姿態変換といえるのか？　姿態変換するかどうかを考察するとすれば、資産（債権・証券・営業資産）全体についてか、あるいは銀行資本（自己資本部分）についてのみか？

②銀行資本（自己資本部分）はすべて「姿態変換しない流通費用」ではないのか（83頁、238頁）

この意味では、銀行業資本がそれ自体単独で、独立に「姿態変換」していると規定することはできない（これはこれまで明言してこなかったことですが）。

「資金を買って資金を売る」というのではなく、「資金をつくる」と考えると、「貨幣融通資本の形式」のようなかたちで、既存の資本概念を銀行業資本に当てはめることはできないことになる。

さらに追求してみるべき論点：可能性として、流通費用を支出して相手の販売の可能性を調査する等して、そこに潜在している「将来の購買力」を「現在の購買力」に転換する行為を「生産」の一種として規定できる。したがって、銀行業資本も、時間軸上で、「資金を《生産》する」資本と規定できる。この点さらに検討したい。

## Ａ.３　姿態変換にかかわる諸問題について

### A.3.1　貸借と賃料・利子について（72－74頁）

①貸借について。貸すモノと返されるモノとが、(1) 同一の場合と、(2) 同一だが消耗した場合があるのではないか？　(1) 貨幣や種籾や土地は貸したモノと同じモノが返される。しかし、(2) 家屋や機材のレンタルでは消耗したモノが返され、賃料には純粋な賃貸料と消耗分への負担代が含まれる。

②なぜ同じモノか、消耗したモノか、という違いが生じるかというと、(1) では土地は本源的自然力なので消耗しない。種籾は再生産過程が借り手の中で完結するため消耗のない同じモノが返却される。貨幣は価値という社会的関係を体現したものなので消耗しない。他方(2) では、再生産過程が借り手の活動の範囲を時間的・社会的に超えているため、純粋な賃料の他に、借り手の外部で行われる、借りたモノの再生産の費用の一部を負担することになる。

種籾や貨幣は、対象物それ自身は消費ないし支払いに使用されるので、返済されるのは「同種」の別の対象物。「同種」ということであり、損耗とか摩損とかという問題は生じない。

「同一」の対象物による返済は、土地・家屋・機械など。ただし、この場合、「同一」といっても使用により破損・摩耗等の変化が生じている場合がある。この場合、同一物に戻すための費用が追加的に支払われる。これは（１）「用益の売買」だけではなく、（２）損耗部分の売買という要因が加わる。この（２）に関しては、借りたものと同じものを返すという貸借の原理から外れる。摩損した機械は、（１）そのものを返すと同時に、（２）摩損部分に対して「貨幣」で支払う、関係が生じる。この（２）と「用益」の価格（賃料）がともに同じ金額として現われ、両者の区別がむずかしくなる。

### A.3.2　固定資本のレンタル業について

①固定資本のレンタル業は、(1) ファイナンシャルリースの場合は、借り手の固定資本の買い入れ資金を貸与する金融業であり、あまり問題はない。　他方、A.3.1(2)で想定されている (2) オペレーティングリースでは、一定期間の利用権を販売する商業資本といえるか？

機械のレンタルを媒介する資本の場合、銀行業資本の場合と同様に、その自己資本がどのように使われるのか、分析してみる必要がある。さらに検討を要するが、基本は銀行業資本と同型である。自ら機械を買って、その機械を貸し付けるのではないであろう。

### A.3.3　固定資本の定義について

「生産資本のうち、一生産期間を基準にその間に使い尽くされる部分を流動資本、それをこえて使われる部分を固定資本とよぶ」（184頁）

←①固定資本を生産資本のみで限定するのは、流通過程は不確定だから、ということか？　（山口『経済原論講義』では流通過程を含んでいても固定資本・流動資本の区別がある）

そうです。

←②連続生産の圧延板、小麦粉など、生産物一単位が想定しがたい生産物については、物理的に投入物が生産（産出）に至るまでの期間を基準にすることになるのか？

「固定資本」という用語をもし定義するとすれば、184頁のようにするほかない、ということです。ただ、この用語がどこまで現実の諸現象の記述に有効かは、あらためて考える必要があります。連続生産も含め、複雑な生産過程に関して、固定資本・流動資本の二分法を適用することには無理があります。この二分法は、利潤率の計算原理を説明するための抽象化された領域での概念規定と理解しておくべきです。

### A.3.4　貨幣の価値の不可知性と増殖の確認について

「致富衝動は、その価値量が不可知な貨幣を貯め込むことでは満たされない。この限界が資本の運動を生む」（65頁）

←貨幣の価値が不可知であれば、個別の商品の価値も不可知であろう。であれば価値増殖自体も不可知ということにならないか？　通常の経済原論では貨幣の価値の安定性が前提になっている。そこを変えると、貨幣から資本への論述の展開箇所以外の他の箇所にもいろいろと波及してくるのではないか？

　（※山口『経済原論講義』54頁「資本は貨幣の循環運動体である」）

価値の「安定性」と「不可知性」は区別して考える必要がある。「不可知性」というのは「不可測性」のこと。統一的な表現をもたないという意味です。商品の価値は、何円というかたちで統一的に表現されますが、この「円」の価値、つまり購買力がいくらかは、せいぜい、さまざまな価格の加重平均としてしか表現できない。「指数のパラドックス」の問題に典型的に示される不可知性があるわけです。ここから、「転売」による価値の維持＝増殖の必然性が生じるわけです。

したがって、貨幣価値の相対的の「安定」をいうことは、不可知性をいうことと背馳しません。

# Ｂ．その他

## Ｂ.１ 流通資本と流通費用

「流通資本の基本は、商品在庫と貨幣準備である」（184頁）

←①82頁「運動体」の項の想定では、100万円の投下資本のうち、商品買取部分が40万円×2＝80万円、流通費用として支出される部分が20万円、とある。この20万円はあらかじめ資本として用意（前貸）される部分で、なおかつ流通過程にあるのだから「流通資本」でよいか？　（商品買取資本も流通資本）

　流通資本には「基本」以外の部分があり、基本以外の部分とは、将来、流通費用として支出される、循環しない資本部分（など）としてよいか？

基本は、資本の「投下」と貨幣の「支出」をはっきり区別すること。あらかじめ、生産資本と流通資本が別々に投下されると考えると混乱が生じる。投下資本のうちには、繰り返し定額で支出回収される費用があり、これが「生産資本」を構成する。投下資本はこれを上まわる残余が必要で、この部分が「流通資本」である、と規定するべき。流通費用は、この残余部分をベースに支出されるが、売買差額から支払われることもあり、流通資本→流通費用という一義的な関係にはない。問題134（215頁）では、売買差額から支出されるケースを想定している。表の下のアステリクスの註記をみられたい。

たとえば、a) 商業施設は流通資本の「基本」以外の部分である。b) 商業施設建設のために支出された費用は循環しない資本部分である。c) 利潤率計算の期間を設定すれば、その資本額は複数の期間にわたって粗利潤から徐々に回収される、ということでよいか？

循環する部分と循環しない部分というように、投下資本を並列で二分することによる困難。「投下資本−生産資本＝流通資本」として規定することで解決すべき問題。商業施設を、生産設備のように考えて、同じように減価償却するかのように考えるべきではない。商業施設ははじめから、すべて流通資本であり、改修補填する対象ではない。

## Ｂ.２　銀行資本の内訳について

②238頁の「銀行資本」のうち、信用調査などに支出されて循環しない部分は流通資本としてよいか？　他に、支払サービス業務に充てられる部分は産業資本の費用価格に相当し循環する資本部分、支払準備に充てられる部分は循環しない流通資本部分か？

その通りだが、循環する部分と循環しない部分に、並列に分けようとするとさまざまな疑問が生まれる。